

## 調査と取材の接点

— アカデミズムとジャーナリズムはいかに出会い、いかに隔たるか —

武田 徹

ジャーナリストの世界に方法論が欠如していると痛感し、どういう形で情報を調べればよいかにも関心を持っている。大学での教育に携わるようになってからは、企画から発信まで網羅する技術・横断的知識、批判的思考力の習得の3つを重視している。インタビュー観の変遷を整理すると、①実証主義的なインタビュー観、②解釈的客観主義的インタビュー観ではまだ実際に語られた体験から実体験に遡ることができると信じられているが、③対話的構築主義では、語りの背景に客観的事実があることが必ずしも担保されない。こうした対話的構築主義はジャーナリズムの可能性を根底から覆してしまいかねないが、その困難をいかに戦略的に乗り越えてゆくか。取材以外の方法をいかに組み合わせるのか。

### 1. 文系なのか、理系なのかを超えた立ち位置

武田徹と申します。今日はこういう研究会でお話する機会を頂きまして、最初にお礼を申し上げたいと思います。と申しますのは、私は全然、研究者ではございませんで、強いて言えばジャーナリスト。ジャーナリストでも二流以下でございますので(笑)、あまり偉そうなこと言える立場ではない。変なこと言ってるなあと思われるに違いない。しかし変なことでも刺激になる場合もありますので、そういった形で万が一にもお役に立てればいいかなと考えて、皆さんの貴重なお時間を拝借して話をしてみたいと思っております。

まず初めに自己紹介的な事をさせて頂きたく存じます。お見せる最初のスライドは過去に私が出してきた本の書名の一部です。今

日お話することも、私の立ち位置のようなものをご理解して頂いた上でお話しした方が良くと思いますので、今まで書いた本を幾つか取り上げまして、自己紹介に代えて、お話を始めさせて頂きたい。

たとえば、スライドに2冊挙げましたけれど、『流行人類学クロニクル』というのは、サントリー学芸賞というのを頂いた本ですが、これはまさに今の社会の分析です。それに対して『偽満州国論』というのはタイトルの通り満州国時代の話です。1930年代から1940年代半ばまでに満州国を舞台にして都市計画とか、あるいは言語教育政策とかそういったものを論じた本です。この2冊を並べますと、お前がやってるのは現在のことなのか、過去のことなのかかわからない、とよく言われます。

文系なのか、理系なのかということもよく言われます。次に『紛い物考』という本のスライドを出しましたが、これはボードリ

ヤールなどを引きまして、いわゆる記号分析のかたちで消費社会分析をした作品です。一方、その横に並べた『デジタル社会論』というのはIT技術がいかに社会を変えたかという内容で、理系色が強い。もっと理系色が強い本もあって日本語ワープロがいかに日本語を電子化したかを調べた仕事もあり、そのために理系か文系かよくわからないと言われていています。

## 2. 近代的な医療技術を日本の近代社会がどう受け入れたか

今を扱ったり、歴史を相手にしたり、文系だったり、理系だったり、脈絡があまりにもないのではないとも言われますが、これは自分としては、実は脈絡があるつもりなのです。たとえば先ほど挙げました『偽満州国論』。これは満州国の話だと申しました。あるいは『隔離という病い』という本もある。これは先ほど蘭さんがお話になったハンセン病がテーマなのです。そしてもう1冊、『核論』という作品がありますが、この3冊は私にとっては同じ問題意識で書いたつもりでした。

満州国は傀儡国家と言われてはいますがそれでも、日本の若手の官僚などがかなり自由に自分の思い通りの政策を駆使出来た歴史があるわけですね。たとえば首都計画の文脈で言いますと、東京市で、震災で都市が破壊された後に、今度こそ東京を地震に強い都市にしよう、ヨーロッパ的な近代都市にしようというビジョンを東京市政に関わっている都市計画関係者は思い描くわけですが、ところが、いろいろ抵抗勢力的なものがありまして、立ち退きはイヤだとか、クルマも走らないのに広い道を造るのは税金の無駄遣いだとか言い始めて、なかなかそれが実現しない。

それに対して満州国であれば、さっき申しましたように傀儡政権の人工国家ですから、かなり日本側の主張が通る状況にある。前から住んでいた中国系住民に有無を言わずに

いろいろ出来るわけです。そこで、満州国の首都の新京、今の長春市ですけれども、新京市を作るときに東京市で震災復興に関わって志半ばで都市改造ができなかった人たちが、新京の都市計画にかなりの度合いで参加しています。今度こそ、新京という街をヨーロッパ的な街に、つまり彼らが理想と考えるような都市に変えると意気込んで乗り込んで来て計画を立て、実行する。

そんな経緯がありますから、新京の都市計画を見ると、近代日本の都市計画関係者たちがどういう都市を理想と考えたかを、そこから分析することができる。それも近代文明の日本的な受容の形を調べる1つの方法ではないかと思いました。そう思って調べて書いたのが『偽満州国論』で、これは、言ってみれば異文化受容史です。

そして『隔離という病い』はハンセン病の本だと申しましたが、私は蘭さんのなさっていらっしゃる仕事とは少しアプローチの仕方が違っていて、隔離医療、つまり、ある種近代的な医療技術を日本の近代社会がどういふふうに取り入れたかを考えたつもりの本なのです。つまりこれも技術の受容史です。

最後の『核論』も原子力平和利用技術の日本への受容史、受容の過程のある種、写し鏡として日本社会を顧みようという試みの本です。

このように3冊挙げましたが、これらは全て異文化受容史の本のつもりなのです。そういう意味では一貫性がある。

## 3. 共同体と公共社会とのある種の緊張関係

そして受容の歴史を描くときに、どのような問題意識を持っていたかについても一貫性はあるつもりです。というのも公共性と共同性の問題、共同体と公共社会のある種の緊張関係というものを、新しい技術なり新しい文化なりを受容することによって、いかに解決

しようとしてきたか、そういう過程を様々なことを通じて調べてきたつもりなのです。たとえばハンセン病の隔離医療史というのもまさにそうで、日本国共同体を病気の人がない国にしようと思った人がいるわけです。そういう形で共同体の排除の論理みたいなものが働いて、ハンセン病の療養所が作られた。ただその一方でハンセン病の療養所の内部も、1つの人工的な共同体になっていった。その2つの共同体が、どのような歴史的な経過を辿っていったか、それを調べてみるとことで、日本の社会において共同体というものはどういう質を持って生まれ、育っていくか、それが公共性とどういう形で対立してゆくのかを考えてみようと思いました。

この公共性と共同性という軸で問題を考えていくという姿勢も、実はこの『偽満州国論』から『隔離という病い』、『核論』に至るまで一貫していますし、それ以外の本に関しても実はそうなのです。現在の流行分析をしている仕事でも、私は共同性と公共性の問題というのを考えているつもりです。確かに、描いている対象は、支離滅裂(笑)というか、いろいろ散らばっているのですが、ジャーナリストとしての武田としては、一貫した問題意識を持って仕事をしてきた多少の自負はあります。それをまずお話しすることで、私の姿勢についての理解を皆さんの間で共有して頂けると、この後の方法についての話の理解にも多少は役立つのではないかなと思いましたが、少し踏み込んで話をさせて頂きました。

さて、私は今の仕事を84年ぐらいからしていますのでキャリアだけは結構長くなっております。仕事を始めた頃はまだ大学院の学生だった。研究者の道を歩むつもりは当時は全くなくて、大学院に進んだのも学部卒ですとまだ力がないなと思って、分析の枠組みを自分で持った上で、社会を分析する仕事を始めたいと思っていました。そこで力を付けるために大学院に進む選択をしました。

そして大学院時代、修士課程の後半ぐらいの時期に少しずつマスメディアで仕事を始めました。そういう形でジャーナリズムの世界に入っていったわけですが、そこで最初に「全くここには方法論はないな」と思った。先ほど蘭さんもおっしゃってましたけれども、同業者の取材の仕方を見ていると、確かに予習しないで行く人は多い。私の場合、本を書き始めると、逆に自分が取材をされる立場にもなりましたが、勉強をしてきてない人が確かに多いです。

#### 4. どういう形で情報を調べればいいのか

取材の仕方についても、蘭さんはずいぶん問題点を指摘していらっやして、耳が痛かったです(笑)、確におっしゃる通りのところがございまして、自分たちの聞きたいことしか聞かない。要するにテープも録らずに印象に残ったことだけを聞いて帰る。印象に残るといのは自分で理解出来たということですが、要するに自分の理解出来る範囲でしか話を聞かない。それは実は取材でも何でもなく、結局他人に取材してるようなんだけど、実は自分で語ってるのも同じではないか。ある種の子定調和的な書き方しかしていないではないかというのが私がジャーナリズムに入って仕事を始めて、自分の仲間たちの仕事ぶりを見て感じたことです。これじゃいけないなと思った経験があります。

しかし、なぜこんなお粗末な結果になってしまうかという自分たちのやっている取材という方法について改めて考えたことがないのではないか。そこで私はジャーナリズムにも、調査方法論のようなものを確立する必要性があると思いました。そして、今はもうなくなってしまったんですが、昔、パルコ出版から出ていた『アクロス』というマーケティングの雑誌で連載を始めました。

パルコをお作りになった増田通二さんとい

う方は社会分析に興味を持っていて、彼の肝入りで刊行されたものです。『アクロス』という雑誌は一般の書店で買える本ではありませんでしたが、かなりしっかりした社会調査の、研究指向の強い雑誌でした。その『アクロス』という雑誌で「情報社会のフィールドスタディ」というタイトルの記事を担当しまして、1年間くらい連載をして、まとめたのが『知の探偵術』という本です。これはどういう形で情報を調べればいいのかということ、自分自身が調べながら考えて行く、そんなスタイルで作った本です。

たとえば『フィールドワーク』という、今でも大学の教科書としてずいぶん使われている本がありますが、その著者の、シカゴ大でシカゴ学派直系の都市社会学の調査方法を勉強されて帰ってきた佐藤郁哉さんに取材をして、フィールドワークの在り方を考える。あるいはもう一人、同じ佐藤ですけど歴史社会学の佐藤健二さんに話を聞いたりもした。そういう聞き取り調査をしながらジャーナリズムにおける調査方法論のようなものを書いてみたいという、そういう気持ちを込めて作った本でした。

そんな本を書いて行く一方で、この時期から私は大学に少しずつ戻り始めます。もちろん専門的な研究者ではないので、教えられることは限られていますが、自分の仕事経験を生かしてメディアリテラシー教育といえますか、マスメディアによって、かなり振幅をもった揺れ方をするような社会の中でどのように生きていくか、いかにマスメディア情報との距離を持つかという、そういう技術を身に付けさせるための教育課目を担当するようになりました。

教育方法としては、「自分でやってみる」ことを重視しました。マスメディアでどのように取材がなされているか、あるいはテレビの番組というのがどのように作られているのかを推し量って知る上で、まねごとかも知れな

いけれどマスメディアで流れているのと同じようなコンテンツを自分で作る経験をしてみるのがかなり役に立つと考えた結果です。

ただ、たとえば法政大学やICUで教えていた時期はジャーナリストになるための人を育てるということではなかった。あくまでもメディアリテラシーを高めるためのルポナリドキュメンタリーの制作だった。主はメディアリテラシーの獲得で、制作は従です。特定の職業に向けてかなりピンポイント的に技術を教えるのは、4年制の大学にはあまりふさわしくないと個人的には思っていて、大手新聞社に入るための知識を与えてくれというような授業の依頼であれば私は引き受けなかったと思います。

## 5. やらせをしたくなる誘惑

ルポとドキュメンタリーの制作を選んだのは、それらが総合的な調査と表現の技術だと思ったからです。新聞の記事のように短いものだと取材の仕方もかなり制限を受けます。複数取材しても分量が限られているので書けない。それに対してルポルタージュというのは、少なくとも15~6枚ぐらいから始まると思いますので、いろいろな調査の仕方を、適宜組み合わせ盛込め。更に表現としても、大学のレポートのように教官が必ず読んでくれるという約束の上に成り立つ文章ではなくて、読者というのは面白くなければ読まないわけです。最初に読者の、読み手の気持ちをつかまなければいけないし、更に最初につかんだ読者を放してはいけません。読ませ続けなければいけない。そのためにやはりメリハリのきいた文章を書くべきですし、場面場面に盛り上げるクライマックス、小さいクライマックスを付けていって、最後に大きなクライマックスを持ってきてドラマツルギーを生み出すような文章の演出術も必要になってくる。

ドキュメンタリーもそうです。テレビの

ニュースのように短い尺であればストレートに映しただけでも済みますが、30分以上になる長い尺のドキュメンタリーを作るとなると、やはり視聴者、見る人の気持ちの揺れを考えながら作っていく作業が必要になってきます。そういう事を考えていきますと、送り手と受け手の真剣勝負というのがあり得る。真剣勝負の中に、総合的な調査の技術、さらには表現の技術が盛り込める。このように調査から表現までを総合的に、しかも真剣勝負の緊張感をもって学ぶということにルポやドキュメンタリーを作るという課題にはとても役に立つと考えてきました。

実際、少しでも面白くしたい気持ちが勢い余って「やらせ」をしてしまったりもする。やらせをしたくなる誘惑がいかにも表現の現場に根強く存在しているか、そんなことも経験を通じて身をもって学べます。そこから、どこまでだったら演出というものが許されるかとか、そういうことも考えなければいけなくなっていく、ルポルタージュとかドキュメンタリーを作るという経験というのは、そうした問題をかなりリアルに意識させてくれるものだと思います。

## 6. 一人で全部できる力を履修者に経験を通じて学んでもらう

そうしたメディアリテラシーの延長上に、今は東大先端研というところに所属しているのですが、今度は本格的にジャーナリスト養成をやっています。

先端研はドクターの学生は少数いますが、それ以外の学生はいないのでオープンスクール方式でいろいろコースを出している。私のジャーナリスト養成コースもそのひとつなのですが、先ほど申しましたように4年制大学でマスメディアのジャーナリズム志望者に向けて入社セミナーのようなことをやるのはちょっとどうかと思っていた。しかし先端研のようにオープンスクールでやるのであれ

ば、ある意味、専門教育も1つの在り方なんではないかなと思ひまして。こちらはジャーナリスト養成とストレートに名乗って活動をしております。

どんな問題意識でやってるかという、幾つかキーワード立てています。まず「一人ジャーナリズム」と私は呼んでいます。今の大手新聞社、あるいは大手のテレビ局というのは完全な分業体制です。取材をする人、それを編集する人、それぞれ専門家がいる。しかし、そのせいで逆に全体に見ることがなかなかできない。蘭さんがご指摘されたマスメディアの問題というのは、ひとつに取材をした人が最後まで責任を取れない体制にあるのではないかと思っています。いわば組織ジャーナリズムの弱点とでもいうか。そうであるがゆえに、この東大のコースではあえて一人で全部できる力を履修者に経験を通じて学んで貰おうと言うことになりました。

だから企画も全て自分で立てる。取材も全部自分です。最終的には一人でも発信ができるようにインターネットを使って配信する技術も教える。網羅的ですからどうしても浅くならざるを得ないのですけれども、少なくとも最低限自分一人で企画から発信までできる力を持って世に出て行ってもらうという考え方でカリキュラム設計をしました。

ただ「一人ジャーナリズム」といっても、フリーのジャーナリストを育てようというわけではなくて、もちろんフリーのジャーナリストにもなれるのですが、マスメディアに入ってもいいと思っています。マスメディアのジャーナリズムの人たちの哀れなところは、組織を離れてしまうと仕事がなくなってしまう。テレビの人が特に過酷な条件にあると思うのですが、テレビでは視聴率1%が約100万人です。そこまでの影響力を持つメディアの中で報道なり表現の仕事をしてきた人が、テレビ局を辞めた瞬間に影響力がゼロになるわけです。この格差というのは、やは

り表現とか報道の仕事に携わりたいと思っ  
ている人間にとってみれば、非常に残酷な環境  
で、表現をしたい、報道をし続けたいとい  
う気持ちが優れば、会社の命令に従って自分  
のしたくない仕事もしてしまう。

そうならないためには、最後の最後で一人  
になっても報道はできるという、そういう力  
を担保しておくことが組織のジャーナリスト  
になる上で非常に大きな保険になると私は思  
います。自分の本当に伝えたいことがあるな  
ら、一人でも伝えるんだ、それが出来るんだ  
と考えられることで、会社の中で、上司と相  
談する時にもやり方が変わってくると思う。  
「ここちょっと問題じゃないか」とか、「安倍  
晋三がこんな番組は流すなと言ってたぞ」と  
か上司に言われて渋々変更とか再編集命令に  
従わざるを得なかったのが、一人ジャーナリ  
ズムの力を持っていれば、「局がダメというな  
ら自分でネットで流して民意を問うたらどう  
か」という選択肢も出てくる。或いはそんな  
ことだって出来るんですよと、上司と交渉出  
来る。その場合、上司をちゃんと説得でき  
るかどうかは、最後の最後で一人で報道がで  
きる力を持てるか否かで大きく変わると思  
うのです。そういう考え方で「一人ジャーナ  
リズム」というスローガンを謳っています。こ  
れ1つめの特徴です。

## 7. 最初にあるのは分野ではなく、 テーマ

2つめの特徴、「横断的知識」と呼んでいま  
すが、このジャーナリスト養成コースは文科  
省の科学技術振興調整費で運営されていま  
す。私が入る前にジャーナリスト養成コース  
を含むプロジェクトの企画書というものが文  
科省側に提出されていて、その時に書かれて  
いた名称は科学技術ジャーナリスト養成コ  
ースだった。先端研だということもあって、科  
学技術系をやると思われていたようです。

私はその企画書が通った後に入って、それ

を軌道修正しました。なぜかといえばジャー  
ナリストというのは自分から専門を決めるべき  
ではない。最初にあるのは分野ではなく、  
テーマでしょう。自分で選んだテーマ、自分  
が伝えたいテーマがたとえば科学の分野に  
なったりとか、あるいは政治の分野になつた  
りする。その結果としてそれが何のジャーナ  
リズムと呼ばれるかが決められるべきであつ  
て、最初から自分は科学技術分野しか相手に  
しないと決めてしまうとジャーナリズムの可  
能性を痩せさせてしまうと思います。科学技  
術ジャーナリスト養成と名乗るのは、新聞社  
などの科学部・政治部・経済部とかの縦割り  
構造の現状の中でジャーナリズムの専門性を  
考えているのであって、これからのジャーナ  
リズムは、そういう旧来の組織ジャーナリ  
ズムの縦割りとは違う枠組みで考えられるべき  
ではないか。そう思って「科学技術」という  
冠を取ってしまった。

あと「科学」という言葉が今は自然科学と  
いう言葉で主に使われていると思う。しかし  
科学というのは人文科学もあるし、社会科学  
もある。人文領域でも科学的なアプローチは  
できます。それも考えの一方にあって、自然  
科学をイメージさせる科学という言葉避け  
たかった。あくまでも人文科学・社会科学を  
横断する知識を提供するような場にしたいと  
も考えてカリキュラムを作っています。

更に「多メディア経験」と呼んでいますが、  
これも先ほどの縦割りではいけないというの  
と通じる問題意識で立てたキーワードです。  
履修生は活字の世界に行きたいとか、テレビ  
に行きたいとか、それぞれ希望の進路を考え  
ています。その通りに希望が叶えられればい  
いと思うんですが、ただ、たとえば映像の世  
界に行ったときに、映像で表現できること、  
できないことがあるわけです。

それぞれのメディアには強い弱いがある。  
ですから初めにメディアありきというのは実  
は問題で、自分が報道したいテーマがあつて、

それを表現するのに相応しいメディアは何だろうと、その順番で考えるべきなのです。そのためには複数のメディアで表現の経験を積んだ上でジャーナリストとしてのキャリアを始めて欲しいと思う。そこでいろいろなメディア、動画メディア、あるいはラジオも私たちはやりましたし、もちろん活字もやりますし、ネットでの表現も経験する。そしていろいろなメディアでのジャーナリズム活動の可能性と限界を知った上で、その先に進んでいって頂きたいと思っています。

## 8. 与えられたものを自明なものとして受け取らない態度

最後に「クリティカルシンキング」と呼んでるんですが、与えられたものを自明なものとして受け取らない。例えば科学という言葉も、科学と科学ではないものを隔てる境界線を常に意識しながら報道という作業に当たって欲しい。あるいはジャーナリズムそのものについても、ジャーナリズムとジャーナリズムではないものを隔てるのは何かという、そういう境界線を意識しながら自分のジャーナリズムを追求して欲しい。そういう気持ちを込めてカリキュラム設計をしています。

こんな考え方で東大ではコースを出しているのですが、これは実は私なりのジャーナリズム批判の活動でもある。今のジャーナリズムに対してここが弱いのではないか、ここが問題ではないかということ踏まえた上でこのコースのカリキュラム設計をしています。そういう事情がございますので、少し冗長になって恐縮なんですけれども、もう少しお付き合い頂きたい。それは調査の方法にも関わることだからです。

調査の技術に関して、うちのジャーナリズム教育の中では「マルチメソッド」を1つのキーワードにしています。ジャーナリズムの世界は、やはり現場主義で、インタビュー取材の比重が高い。何はともあれコメントを

取ってこい、取材をしてこいという形で記者は走らせられるわけです。しかし実はインタビュー、つまりいわゆるオーラルメソッドによる取材だけでは瘦せた調査しかできない。インタビューの良さを生かすためにも、インタビュー以外の方法を使うというのがとても大事です。あえてインタビューとインタビュー以外の調査技術を同時に使うマルチメソッド型の調査技術を身に付ける必要がある。

皆さんのお手元にお渡しした資料の中にも表としてあげていますが、縦軸に調査方法が並べてある。取材、インタビューがあり、オーラルメソッドの取材だけではなくて先行する調査報告の利用、文献もありますし、統計もあるだろうと。あと独自のアンケート調査も可能だし、観察、たとえば聞き耳を立てて傍らで聞いていることだって立派な調査です。あるいは仮説検証・実験のような自然科学的な作業もある。それらを縦に書きまして、横軸はそれぞれの特徴を書いています。佐藤郁哉さんもこれに近いマトリックスでそれぞれの調査方法の強い・弱い、得意・不得意というのを、『フィールドワーク』の中で書いておられますけれども、これは私がそれに多少修正を加えた表です。もちろん解釈の違いもあって、「ちょっと違うんじゃないか」と思うところもあるでしょう。そこから考えて頂くためのきっかけを与えるという意味も含めてかなり乱暴に書いております。こうでしかありえないと自信を持って作った表でないことをご理解頂ければいいと思います。

## 9. インタビューは日常会話ではないということ

例えば取材でインタビューします。インタビューに行けば話を聞けるものとジャーナリストの多くが信じて疑わないのですが、実はそれはかなり特殊なシチュエーションです。インタビュー取材を受ける相手はやはり身構

図 1

	取材(インタビュー＝オーラポールメソッド)	先行調査報告の利用		(独自に行う)アンケート調査	観察・聞き耳を立てる。		(自然科学的)仮説・検証・実験
		文献	統計		参加	非参加	
干渉	強	無	無	弱	中	無	無
近しさ・相互性	○(オーラポールに注意)	×	×	?	◎	○	×
事例数	少	中	大	中	少	中	?
因果・法則性の把握	△	?	○	○	○	△	◎(実験まですれば)
調査の柔軟性	○	△	×	△	○	○	△
コスト(時間・金銭)	?(ケース次第、以下同様)	少	?	中	?	少	大(実験まですれば)

えるわけです。となるとインタビューという方法自体が相手に干渉する要素が強い。インタビューされた相手は、よそ行きのコメントを語ってる場合があるわけです。非常によそよそしいことを言っている場合がある。だとするとインタビューだけを信じて書いてしまうというのは問題ではないか。インタビューを受けていない時にどんな状況になっているか平行して調べるべきです。たとえば会社の経営者に話を聞くと、応接室で話を聞いた時にはこんなことを言っていたと。でも本当に言葉通りに経営してるのかどうか確かめるためには、その会社に取材ではない機会にふらっと行ってみたりするといい。そうして様子を見てみる。本当に経営者が言ったとおりになっているか確かめてみる。そういう観察のやり方でインタビューで聞かれた情報を確かめて、相対化していく、そういうことが必要なんだと思います。

取材というのは、オーラポールと言

ますけれども、あまりに仲良くなって意気投合してしまっても出来ない。取材者が被取材者と立場を同じくして、それを代弁してしまうようになってしまいます。いわば取材者自身が相手のスポークスマンになってしまう。そういう可能性もあるのですね。ここでも取材の人間関係の偏りを埋めるために他の方法を組み合わせる必要がある。

あとインタビューというのは日常会話ではないと意識する必要がある。これもジャーナリズムに関わると、つい忘れがちです。自分たちが取材を日常的に繰り返してるわけで、本人は緊張感なしに取材をしまいがちなのですが、相手は取材を受ける機会は減多にないわけです。今まで全く知らなかったジャーナリストが突然来て、これこれについて話してくれと頼まれる。これは日常的にはおかしい状況です。誰だかわからない人に対して、自分の秘密なり、自分しか知らないようなことを簡単に話すはずがない。インタ



ビュー取材という場面は、そういうとても非日常的なセッションになっていて、あくまでもそこで語られているのは日常会話ではないとジャーナリストの側も意識しなければいけ

ないと思います。

それが理解出来てこそ、そういう非日常性の敷居をいかに超えるかという戦略的な判断が出来る。たとえば非日常の不自然さを忘れ

図 2

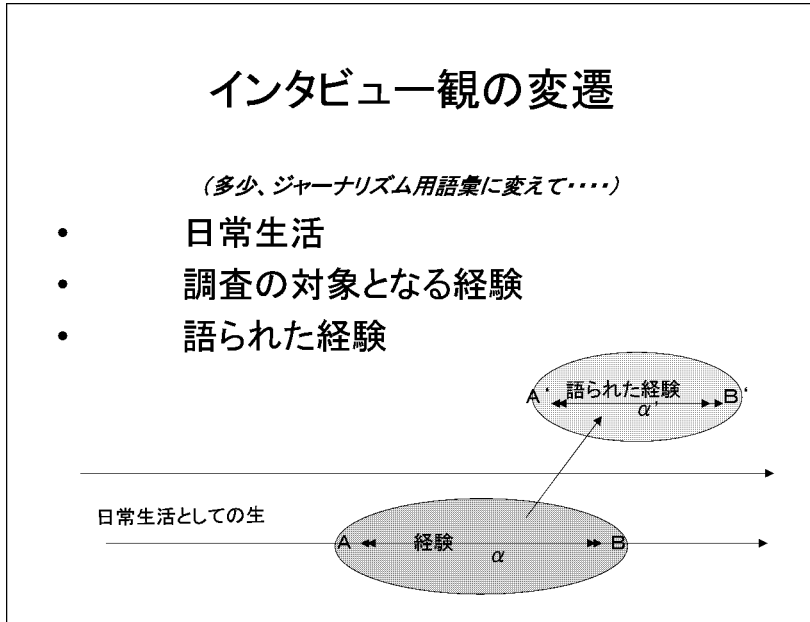


図 3

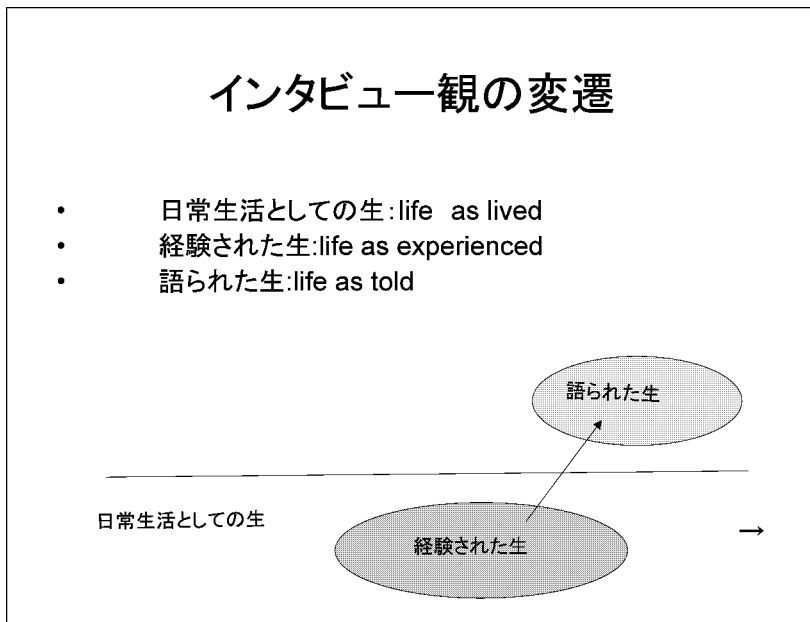
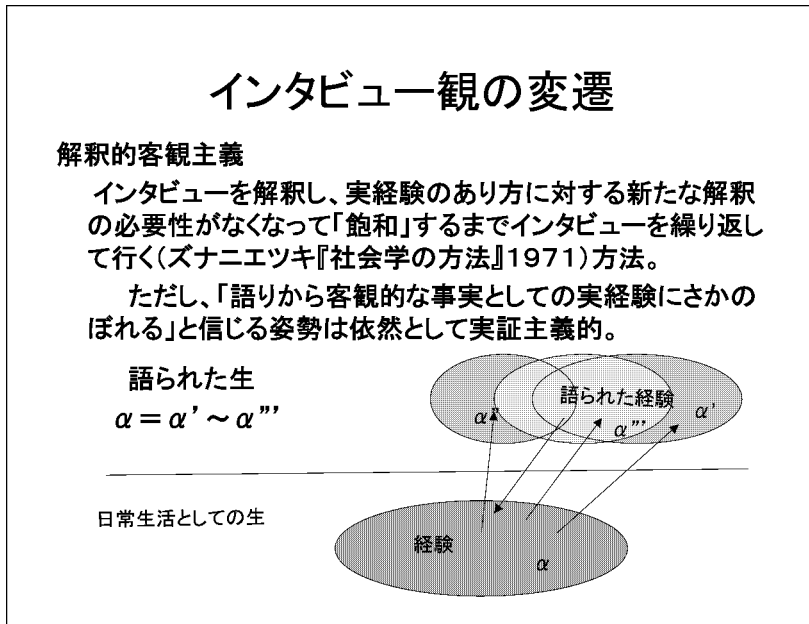


図4



させる技術とはどういうものか。あるいは不自然さは不自然さとして納得してもらい、敢えてここで話す価値なり意義なりを納得してもらおうという方法もあります。いずれにせよ、その種の配慮が出来るかどうかはすぐ大事な分かれ道になると思います。

#### 10. 「解釈的客観主義」と呼ばれる立場

インタビューという行為そのものについての理解も必要です。この種のことは社会学系の人にとっては常識かも知れませんが、研究者の方々がいらっしやるこの場で、こんな話をするのはちょっと面はゆいところがありますが、たとえばシカゴ学派とか、社会調査にオーラルメソッドを入れた初期の人たちはシンプルなインタビュー観に基づいて調査をしていたと言われています。語られた経験  $\alpha'$  から実経験  $\alpha$  に遡ることができると信じていた。語られた経験  $\alpha'$  っていうのは、言語化された経験であり、それは言語化される前の実経験  $\alpha$  を表象している。

このように言葉とものの関係を1対1に対

応していると考える実証主義的な価値観、言語観、表現観の中でオーラルメソッドにおける社会調査というのを考えていたと言えます。この辺は蘭さんご紹介になっていた桜井厚さんの『インタビュー社会学』の中の記述を基にして話していますが、こうした初期シカゴ学派のオーラルメソッドの取材方法、調査方法に対して、それで果たして一般的な現象を説明できるのかという、いわば代表性の欠如に関する批判が寄せられるようになる。一人の話を聞くだけで、それで社会が分析できるのかと疑われるようになったということです。

そこで出てくるのが桜井厚さんの言葉ですけれども「解釈的客観主義」と呼ばれる立場だった。経験を語る人がいて、そこで語られた経験を聞き取る。しかし、一人に聞き取っただけで終わりにしないで、「この人、本当にその経験についてちゃんと語っているのか」という疑いがあれば、更にまた別の人に聞いてみる。その聞き取り調査結果を総合すると「どうも調査の対象となっていた経験という

のはこういうものだったらしいぞ」という解釈が出て来る。その解釈に疑問があれば更にまた聞く。

こうして次々に聞いていくと結果として解釈に対して新たな解釈を加える必要がないという段階に至る。これを飽和と呼びますが、飽和するまでインタビューを繰り返していく。こうしたやり方をすれば実際に語られた経験から実経験に遡ることができると思える立場を解釈的客観主義と桜井さんは呼んでいます。

## 11. ニュージャーナリズムという運動

私がジャーナリズム論の方が専門ですが、こうしたインタビュー観の変遷を辿ってみて「面白いなあ」と思った。というのもジャーナリズムの世界でニュージャーナリズムという運動があります。これは60年代のアメリカで生まれたもので、今までのジャーナリズムと違うジャーナリズムをやろうという気運が強く起こった。たとえばゲイ・タリーズ『汝の父を敬え』、デビッド・ハルバスタム『ベスト&ブライテスト』とか、ニュージャーナリストと呼ばれる人たちがいて、それぞれに代表作があります。彼らにとってのオールドジャーナリズムとはやはり新聞のジャーナリズムだった。非常に短い文章でこんな事件が起きたと、そういうことしか伝えていなかった。それでは出来事そのものの全体像が分からないのではないかと。もっと長く時間をかけて取材をして出来事そのものを再現する、そういう仕事をしなければジャーナリズムはその使命を果たせないと彼らは考えたわけです。

たとえばデビッド・ハルバスタムの『ベスト&ブライテスト』っていうのはベトナム戦争に突入してゆく時期のアメリカの政権がどんな政策決定をしてきたのか描いた作品です。トム・ウルフには『クール・クール LSD 交感テスト』という作品がありますが、それはドラッグカルチャーとはどういうものだった

たかを描き出した作品です。あるいは同じトム・ウルフで『ザ・ライト・スタッフ』はアポロ計画になる前のマーキュリー7(セブン)計画がどういうものだったか描いた作品です。まさに宇宙に人が行く。その過程で人の意識はどう変わったのかを描こうとしたわけです。

新聞報道は、たとえばマーキュリー7の宇宙飛行士が初めて宇宙空間を何分間飛行したとまでは報道するけれど、彼がそのときどんなふう考えたか、宇宙空間を経験することによって彼の考え方がどう変わったかまでは描かない。それに対して物事を全体的に描きたいと望んだのがニュージャーナリズムの仕事でした。

なぜこんな話をしたかということ、オールドジャーナリズム、新聞のジャーナリズムの取材方法は出来事がどんなものだったかということを知りたいに聞かなくていいです。「あそこで交通事故があったんですけど、あなた目撃してたでしょう。どんなふうでしたか？」と。その目撃した人が被取材者として語った言葉が記事の中に入る。語った人がAさんであれば、「Aさんによるとワゴン車がトラックに追突した、と言っていた」と。そういう形で書かれるのが一般的な報道の文体です。この過程においてはウラを取る努力をもちろんする。この人はこう言うんだけど他の人はどういふに言うのかなということを知りたいとはします。ただ締め切りがあったりとか、記事の分量が短いですから、複数の取材源に聞こうという意欲があまり強くはない。最悪、聞けなくてもとりあえず締め切りが来てしまえば、Aさんはこういうふうに言っていた、あるいはAP通信はこういうふうに報じているとか、出典を書くことによって「語られた事実」の位相で事実性を保証する書き方をしていたのが、ニュージャーナリストたちにとっての古いジャーナリズムです。これはなくなっただけではなくて今でも続いている一

般の報道のスタイルですが、それに対してニュージャーナリストたちはどうしたかという複数取材先に聞く、本当にたくさんに聞きます。ニュージャーナリズムの作品のあとがきにはこの本は数百人の取材先に聞いた云々と謳っているものが多い。アメリカのニュージャーナリズムの作品はみんなそうです。

何でそんな多くの人に聞かなければいけないかという、それぞれの人がそれぞれの場面から出来事を見てるわけです。一人の人にしか聞かないと一面的になってしまう。二人に聞けば二面的、三人に聞いたら三面的。出来事を三面で区切るの、丸かった出来事が三角形になってしまう。それではダメで数限りなく聞いて行けば、多角形のカドが増えて次第に元の丸に近づいていく。完全に丸になった時点が、かつてあった出来事そのものになる。たくさんの人に聞けば、かつてあった出来事そのものを再現できると、そういう信念に基づいてニュージャーナリズムのジャーナリストたちは仕事をしてきた。

これは解釈的客観主義に通じる方法ではないかと思うのです。解釈的客観主義の、複数の人に聞いて、それが飽和するまで取材していくというやり方は、ニュージャーナリズムの調査方法に通じる。時期的にも近いので影響があったのかも知れないと思っています。この検討作業は私の今後の課題です。

ニュージャーナリズムと社会調査の学説史の相関はともかく、こうした調査観の変遷を知っておくことがジャーナリズムの取材方法を改めて対自化して考えることに通じるのは間違いない。そういう知識を持っていると取材方法に悩んだときにも助けになってくれると思います。ですので、こういう、およそジャーナリズムの世界では教えないだろう、社会調査史とか、それとのアナロジーで取材を考える作業もジャーナリスト養成コースの中ではするようにしています。

## 12. 対話的構築主義というラディカルな相対主義

さて、オーラル調査史の流れで言うと、解

図 5

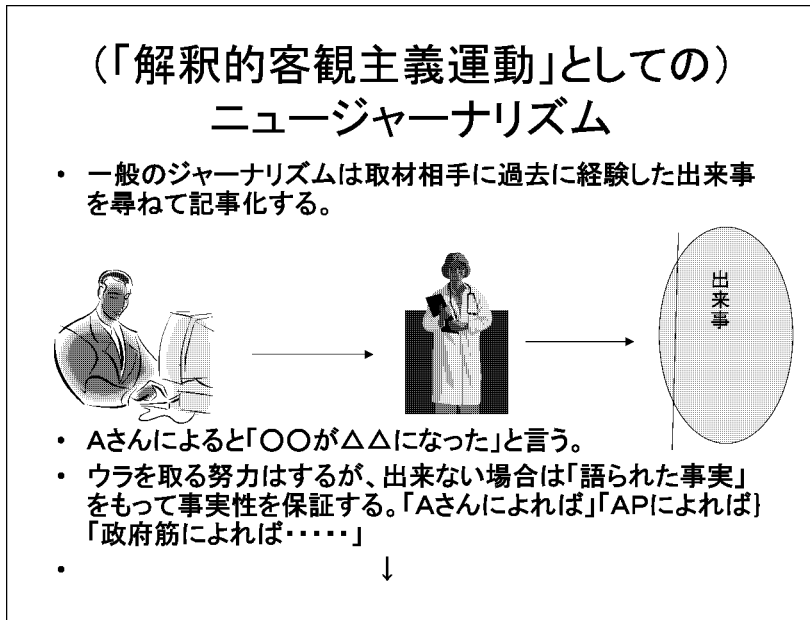
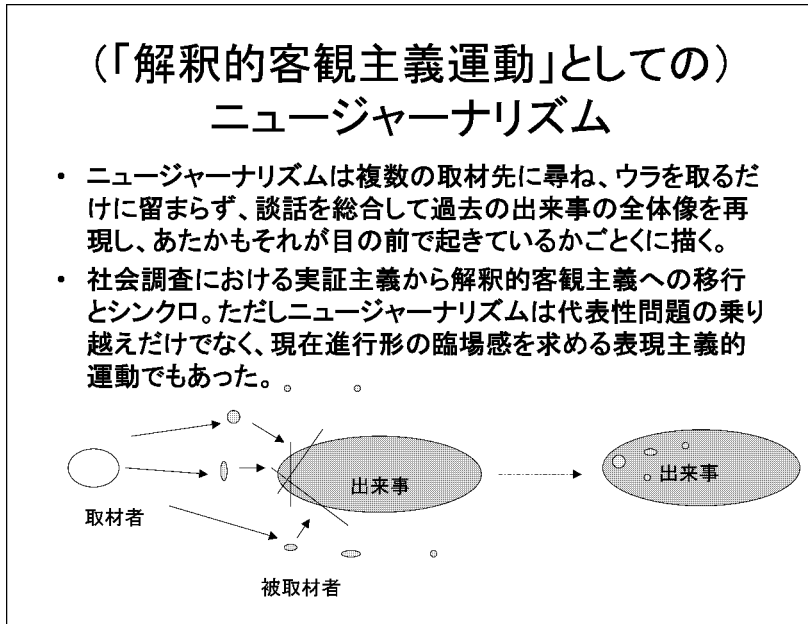


図6



解釈的客観主義の先が更にあります。今のインタビューに対する考え方の主流は、先ほど蘭さんの話の中にもありましたけれども、対話的構築主義です。語られた経験と実経験というのは、本当に1対1に対応するのかと疑う。複数に聞けば実経験に戻れるというのも実は安直ではないか。語られた言葉のレベルと実経験の位相というのはあくまでも違って別物だと考えるべきではないかと。語られた言葉というのは、語らせてるインタビュアーなりインタビューの状況なりによって、作り上げられている、事後的に構築されている。そう考えるのが相互的構築主義のインタビュー観です。

こういうものも、やはりジャーナリズム教育の中で受け入れなければいけないんだと私は思います。対話的構築主義では、インタビューをインタビュアー、インタビューの相互性の中で構築されるものとみなします。こうして語られた経験は相互行為の中で作られていくんだとする考え方をジャーナリズムはどう受け止めるべきか。そうした問題意識

もこれからジャーナリストになろうと思う人であれば持たなければならないでしょう。

対話的構築主義の場合には、語りの背景に客観的事実があるということは必ずしも担保されない。経験は事後的に対話によっていくらかでも再構築され得る、語られた現実 $\beta'$ の背景に $\beta$ があるということは、それが語られたという事実から遡れないと考える。それはある意味で極端な話としては反実在論というか、ラディカルな相対主義になってしまう。これはジャーナリズムに対してはかなりの脅威ではないか。というのもジャーナリズムというのはシンプルな世界観の上に成り立っておりまして、言葉によって起こった事実を伝えられると知っているわけです。言葉で事実を伝えられないとなるとジャーナリズムの定義自身が否定されてしまう。

となると、対話的構築主義というのは根底からジャーナリズムの可能性を覆してしまいかねない。そこで、どうジャーナリズムを守って行くのか。構築主義の達成を無視するのではなく、正しく踏まえた上で、それでもジャー

ナリズムがジャーナリズムたり得る調査方法はどうか考えて行かなければならない。語りを聞きさえすれば何が起きていたか分かると考えていたのは、どうも間違いだったらしい。そこでどう聞くか、そこからある種の戦略的なインタビューの仕方が出てくるのではないかと思います。

そしてインタビュー後の分析も重要になってきます。ジャーナリストもライフストーリー分析の方法論、あるいは会話分析法などを用いるべきだと思います。談話というのは語られている言葉が1つのレベルでつながっているわけではなく、重層的なものなのです。その人が自分自身の言葉として語る、いわゆるパーソナルストーリーだけではなく、その人が共同体の価値観、共同体の建前のようなものを代弁して語っている場合もある。更には社会通念を語っている場合もある。そういうような重層的な言葉が折り重なってその人の語りになってゆく。その重層的な在り方がどのように織り込まれているか、これを取材後に録音テープを聴きながら分析し、たとえ

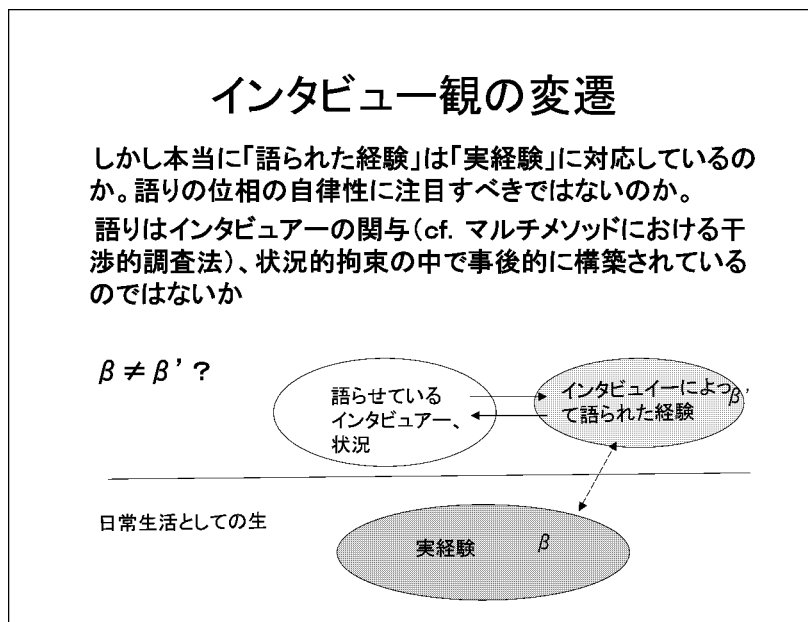
ばコメントを使うときにもどこをどう使えばいいか考える慎重さが必要になる。

### 13. 会話分析の手法としての「会話の順番取りルール」

更にもう1点、これも会話分析の手法ですけれども、「会話の順番取りルール」というものがある。これは会話分析でよく引かれる例ですが、会話というのは自由に繰り上げられているようにみえるけれども、実はルールがある。一人の人が話していて、次に誰が話すかというのは実はルールがあって、そのルールに違反する場合には何か不自然な力が働いていると考えた方がよい。

そこで、会話がどのような順番で進んでいったかを分析することによって、そこに働いていた権力関係を分析できる。そういう考え方に基づいた会話分析という方法が社会学にあります。同じ作業をジャーナリズムでもすべきだと思います。会話がどのように権力関係の中で構築されていたか分析しないと、その背後にあった事実と遡れない。いかに取材

図7



の語りが構築されたかを分析し、それを解きほぐして語られていた事実に向ける必要があるわけです。

このようにジャーナリズムの取材でも、インタビュー方法自体の在り方を考え、語られた言葉を鵜呑みにせずに分析して行く方法が必要です。ところが……、実はここから急激にトーンを変えるんですが、実はそういう方法論というのが、実際に現場でどれぐらい役に立つかと言うと、実は多くを期待し過ぎると裏切られる。変な言い方ですが、インタビューは方法論的にアプローチできる部分と、方法論ではカバー出来ない、ケース・バイ・ケースで対応しなければいけない部分が両方ある。ケース・バイ・ケースで対応しなきゃいけない要素というのは非常に大きくて、方法的にいろいろ考えて準備をしても常に裏切られていくプロセスがある。それがインタビューの現実なのではないかと思えます。

一番最初に私がジャーナリズムの世界に入ったときに「ここには方法がない」と呆れ

たと申しましたが、実際に経験を積みながら考えていくと、実は方法的な姿勢で対応しようと思っても対応しきれない部分というのが明らかにあることも分かってくる。そこから少し逆説的な言い方ですけれども、敢えてジャーナリズムの無方法性というものを再評価することもできるのではないかと思います。

### 14. 無手勝流であるがゆえの型にはまらない対応力

ここまではどんな形でインタビューすればインタビューが正確にできるか。語りの言葉から実経験に戻れるかということと話してきましたけれども、実はインタビューというのはインタビューだけで完結するわけではなくて、インタビュー前から始まっている。どういう形でアポを取ったかとか、紹介者があったか、紹介者とインタビュアーの関係はどういうものか。そういうことも含めて、実はインタビューの中でも役割というのは決まってしまうことが多くて、それはある意味

図 8

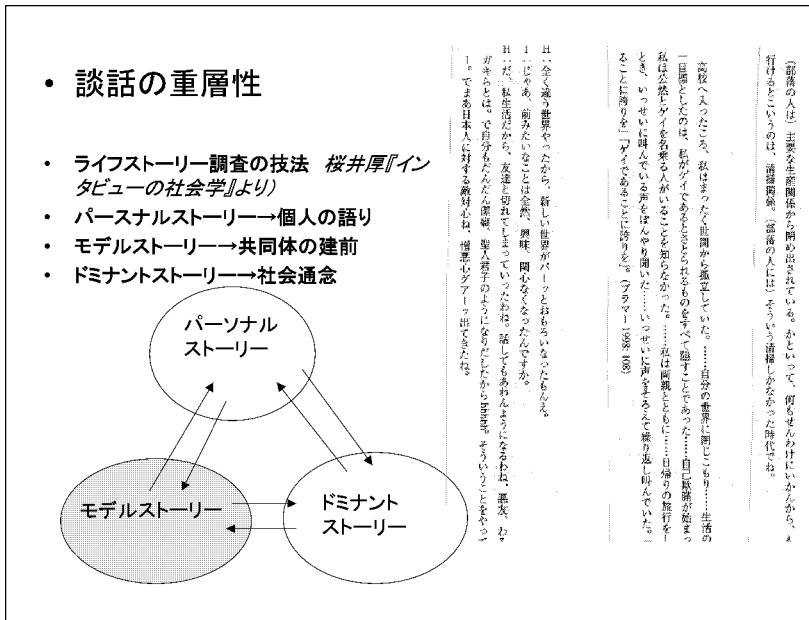


図 9

### 談話を成立させる権力

- 「会話の順番取りルール」
  - 1: 他者選択 (現在の話し手が次の話し手を指名する)
  - 2: 自己選択 (現在の話し手が次の話し手を指名しない場合は、その場で話し始めた者が次に話す権利を持つ。)
  - 3: 自己継続 (現在の話し手は話し続ける権利を持つ)
- 順番取りルールに違反する場合にはなんらかの権力が働いている。

会談例① [記事] Fは京大、Mは男性

F: [中略] もう完全に字にのせておきたい (一)

M: わりと、ん、そして考え方もっていいか、

---

F: そんなことも、ペロペロにあつちの時は (一)

M: わりとこころ、専攻が変わったりとお尻が変わった (略)

会談例② [小説] Aは男、Bは妹、Fは父親

IA: 中華料理と焼き肉だったらどっちを食べる?

IB: (3.5)

IF: うん? 食べたいものを言わないと。うふふ (笑い)

でどうしようもない場合がある。あるいは取材内容とか取材のタイミングの問題もある。それを発表する時のメディアの問題、どのメディアで発表するか。そのメディアに対して被取材者がどう感じているか。そこで語りたいと思うか、思わないか。そういう問題もあります。インタビュアーの人柄、性格、教養とインタビューのそれとの相性はどうか。こんなことを考えていくと本当にケース・バイ・ケースで対応せざるを得ないことは多いです。

そう考えて行くとジャーナリズムに方法がなかったことのメリットも一方で認めなければいけないと思う。無手勝流であるがゆえに型にはまらない対応力を発揮できる場合がある。方法に縛られず、まさに融通無碍に、こだわりなしにその場その場で優雅に対応して行くタイプのジャーナリストがいます。全員とは言いません。ほとんどの人は逆に確かな方法を持たず、うまい取材ができてない。うまくゆく人の場合も、いつもうまくゆくわけではないのですが、方法的な思考なしに動物

的な勘で、非常にうまい取材を幾つもこなしている人がいる。それがなぜ可能かということも見なければいけないと思います。

たとえば、よく日本のマスメディアの問題性として記者クラブ制度が挙げられる。記者クラブで言われたことだけを文字に起こして書いてるだけじゃないかとよく新聞は批判されます。確かにその通りの人もいるんですが、そうじゃない記者もいる。記者クラブというのはあくまでも会見の情報を取るだけ。自分の独自ネタというのはやはり自分で取って来なきゃいけないと思って、まさに夜討ち朝駆けとよく言いますけれども、24時間営業のような形で取材相手と関係を取ろうとする人がいます。本当に個人的な信頼関係を作っていくような、そういうことができる人が一部にいて、そういう人がうまくいけば特ダネを取ってくる結果になるのでしょう。

そういう信頼関係を作っていくプロのジャーナリストの在り方というのは、我々が社会調査というものを考える時にやはり視野に入れる必要があるのではないかと思います。



す。学問の世界ですとどうしてもきれいな事で考えがちでしょうから、そうではなくてもっと泥臭い努力みたいなものも、視野に入れた方が社会学の社会調査をリッチなものにするのではないかなと思います。

たとえば最近、これはあまりいい傾向ではないと思いますが、取材を受ける条件としてお金を要求する人が増えています。この傾向に一番動揺しているのはNHKで、NHKは制度的に謝金が払えない、謝品までなのです。一応、貨幣価値で3万円ぐらいの謝品までは渡せるらしいのですが、そこから先は出せない。それに対して、特ダネ的な価値がある情報で相手が金銭の要求をした時に民放はかなり払うようになっていきます。そういう謝金額の違いでNHKは情報を取れなくなってるという、とても情けない状況がありまして、NHKの記者は自分たちのできる範囲で補おうとしています。それは局にも内緒で自腹を切って払うという方法もあるようだし、一方で、そういうお金ではないところで被取材者との関係を作っていく努力をしてる人もいます。たとえばそこでどういう努力がなされているかを知っておくのは、社会調査の在り方を考える上で役に立つと思います。

## 15. 取材相手との信頼関係を作っていく努力

これは私が以前にある通信社の司法記者クラブ詰めだった記者の人から聞いた話ですが、彼も自分だけに情報を出してくれるニュースソースとの関係作りに、非常に苦労していました。彼が言うには、記者クラブで会うと「たばこをくれ」とよく求める人がいたらしい。その人に対して「じゃあどうぞ」と言って、たばこを差し出すのですが、その時に20本入りのたばこの箱の中に8本くらい残しておくらしい。どうしてかという、箱の中から1本吸って返そうとする。その時に「あ、どうぞ」と言う。その時に例えば12

本残っていると「いや、こんなには貰えないから」と相手は思う。ところが8本ぐらいだと貰ってもいいかと思ってしまっただけで受け取ってしまう。そこである種の「関係」ができる。すごい細かい話ですが、そんなことの積み重ねで人間関係を作っていくというエピソードを聞いたことがあります。

別のノンフィクションのライターですけれど、彼はえん罪ではないかと思われるある事件を追っていた。事件について、かなり司法に対する疑惑を感じつつ記事を書いているわけです。そこで、その事件を担当した裁判官が裁判所から出た後、ずっと後をついて行く。その裁判官が自分の家の近くで電車を降りて本屋に寄るわけです。そして、そのノンフィクションライターが書いた記事を読む。自分のことがどう書かれているか、彼も気になっているわけです。そしてじっと読んでいて、結局、買わないで置いて帰ったらしいのですが、その時にノンフィクションライターがどうしたかと言うと、裁判官が読んでいたページを開けて紙に触ってみるわけですよ。すると汗ばんでいたという。つまり裁判官の心の動揺みたいなものをそこから察して、これは自分のえん罪説は間違っていないのだという確信を得る。それを次の記事を書くときに生かしたと話していました。ジャーナリズムの中でも非常に熱心に取材をして事実に向っていかうと思う人は、そんなことまでやっている例としてお話をしました。

取材源秘匿の話も、ここで敢えて言っておきたいんですが、たとえば自分に対してリークしてくれた人がいる。でもそれをそのまま書いてしまうと、その人が漏らしたということがばれてしまう場合がある。ばれてしまえば口封じのために配置転換されるわけです。そうなると思わなくてリークして貰えるまで育んだ人間関係が台無しになる。

で、その時にどうするかというと、わざと間違えるんですって。その人から出たってこ

とがわからなくなるように、わざと情報を変えて報じるそうです。誤報になるわけで記者としての体面上はまずい。しかしそこまでやっても、その人との関係が壊れないように保つわけです。これはちょっと評価が割れるところだと思いますが、その記者にとってみれば小ネタでは誤報してもいいわけです。

というのもそこではまだ彼は勝負に賭けてないんですよ。もっと巨悪を追及したいところがあって、その人との関係をもっと深めたい。そこでその人との関係破綻を防ぐために、その人がリーク元だって分かって配置換えされることを避けるんですよ。そのために取ってその人から情報が出たことがわからないようにする。そして自分の会社までだまして誤報を流す。そんなことまでしても取材相手との関係を守っていく。

故意に誤報をするのはどうかと思います。でも、その記者の考え方としては最後に自分はジャーナリズムの仕事をするんだと、巨悪を打つような公共的な情報の使い方をするんだと、最後はジャーナリズムの側に戻るために、それまでの過程として今は確信犯として誤報までするという認識らしい。こういうある種の戦略的なやり方の中で社会調査というのは成り立つんだということをその話を聞いたときに思いました。

## 16. どれほど戦略的な姿勢が取れるのか

取材源を守るということについては私は個人的にちょっと自戒を込めて言いたいこともあって、蘭さんの仕事とも関係あるんですが、先ほど僕ハンセン病の本が1冊あると申しました。あまり具体的なことを言うと、もしかしたらご本人に迷惑がかかるかも知れないので、ちょっとぼかしますけれども、私の取材を受けてくださった方が、それが原因になって、かなりひどい異動命令を受けてですね、その人は結局、ハンセン病の世界から身を引

くのです。国立療養所のある職員だったので、厚労省のプレッシャーでその療養所を辞めざるを得ない状況になって、今は無医村でお医者さんをしています。

この人が僕に聞かせてくれた話は、彼がずっと前から言いたかったことだったらしい。だからある意味では彼は「自己実現になった」と後で手紙をくださったのですけれども、そうは慰められても自分の作品が原因となって取材に協力してくれた人の人生が変わってしまったというのはとても心が痛む。記事にする前にもうちょっと考えるべきだった、と思いました。

取材源を守るために、取材対象となった人がどういうポジションにいるか。例えば厚労省の医療行政のシステムの中でその人はどういうポジションに居るかということをやはり取材して調べておくべきだったと思う。そのコメントを出すことによってその人がどうなるかということまで想像した上で、そのコメントの扱い方を工夫するべきだった。もしかしたら嘘を書くという選択肢まで含めて、その人を守るために何かしなければいけないのではと思っています。

もちろん、最後の最後は自分の伝えたかったことを伝えなければ意味はない。しかしそこまでゆく前にどれほど戦略的な姿勢が取れるのか。それはジャーナリズムのプロに学ぶところがあるのではないかと思います。切った貼ったではないけれど、そういう真剣勝負の部分がジャーナリズムには多少はありますので、確かにいろいろ問題点はあってあきれるところもあるのですが、ジャーナリズムを視野に入れて社会調査の在り方をもう一度考えてみると、幾ばくかのヒントは得られるのではないかとも思っています。で、今日は取ってそういう話をさせて頂きました。私はジャーナリズムに社会調査の方法論を持ち込もうとして来ましたが、逆に社会調査にジャーナリズムの無方法や、取材以外の方法

を持ち込んで考えることの意味もあるのではないかと、そうした双方向性のダイナミズムが社会調査とジャーナリズムを互いに活性化

できればいいと思います。

ちょっと予定時間より延びましてすみません。ひとまず、以上にさせていただきます。